

「平和の碑にこめた思い～韓国から制作者たちを迎えて」

2018年1月31日 大阪市内ドーンセンター

主催：日本軍「慰安婦」問題・関西ネットワーク

「平和の碑」作家 金ソギョンさん、金ウンソンさんの講演から抜粋

(文責：関西ネット)

金ソギョンさん：金ウンソン作家が2010年1月の水曜デモを目撃しました。日本大使館前でハルモニ（おばあさん）たちや市民が集まって何をしているんだろうと思いました。とても驚きました。一番最初に私たちが水曜デモを目にした瞬間でした。

初めて見たんですが、この問題がなぜ今も解決しないままきているんだろうと考えました。

何故なら91年に金学順ハルモニが「慰安婦」だったと証言されて、それから20年も経った時でした。私たちはとても恥ずかしくて申し訳なく感じました。それで挺身隊問題対策協議会（挺対協）を訪ねて、私たちに出来ることは何だろうか、手伝えることはないだろうかと尋ねました。

その時がちょうど水曜デモが始まって20年の時で、1000回水曜デモを開こうという直前の時期でした。20年経ったので日本大使館前に記録と記憶を残すために平和の碑を建てようと考えている時期でした。それで私たちが平和の碑のデザインを担当することになりました。塔のような碑を作る考えでしたが、そうではなくコムシン（ゴムの靴）を使って象徴となる物を考え始めました。

そういう中で、駐韓日本大使館が韓国政府に日本大使館の前に何も建てるなどと言ってきました。私たちは理解ができませんでした。何故なら加害国が被害国に何故そういうことが言えるのか理解できませんでした。私たちは彫刻の専門家なので彫刻の碑を建てなければ
ならないと考えました。

ハルモニ達は60代から20年間ここで闘ってこられました。私たちはハルモニ達が闘っている姿や恨を持っている姿を建てようと考えました。そんなことを思いながら被害女性たちが闘っている姿を残すのがいいのではないか、そういう思いを込めた物がいいのではないかと考えました。そこで闘っているハルモニ達は14、15歳の若い時に連れて行かれた人たちがたくさんいらっしゃいました。騙されて連れて行かれた人たちもたくさんおられました。ハルモニ達は大事な青春時代を失くしてしまい、だからこそ碑は少女時代の姿のデザインになりました。連れて行かれた時代の少女たちが日本大使館前に座っている姿を作ることになりました。

演技者が演技をする時にどれだけ思いを込めて演技できるのかと考えると、私たち作家が作品を作る時にどんな思いを込めたらいいのか悩みました。いろんな過程を通して現在の姿になりました。その時代の痛み、戻って来てからの痛み、失ってしまった少女時代の夢を込め、このような姿になりました。日本に謝罪せよという思いと、私たちの反省の思いを込めてみました。そしてこれから未来世代の子どもたちが同じような被害に遭わないような社会への願いも込めました。そうやって、ハルモニ達の思いを永遠に繋げるようになったと思います。